楊守敬作品年譜稿

髙橋由利子

【凡例】楊守敬（一八三九～一九一五）の年譜作成に関しては「鄰蘇老人年譜」（《楊守敬集》・謝承仁主編・湖北人民出版社・一九八八年四月発行）の中で「辛亥（一九一一）十一月十一日、鄰蘇老人記於上海虹口旅次」とあることから楊の年譜はこれを定本として用いた。

さらに稿者は平成十五年度大東文化大学文学部書道学科卒業論文における年譜稿をもとに改稿を試みた。年譜に用いた参考文献は次の通りである。

『書道全集24中国14清Ⅱ』平凡社　一九八二年九月一日初版第十八刷発行・『書壇百年』著者安藤榻石　木耳社　昭和三十九年八月五日発行・『明治　大正　昭和　書道史年表』近藤高史編　木耳社　一九八五年三月二十日初版発行・『大清帝国』増井経夫　講談社　二〇〇二年一月一〇日発行・『訳注　鄰蘇老人書論集』藤原楚水著　省心書房　一九七四年九月発行・を用いた。

尚、作品年譜については、制作年代が明確なものは年譜にそのまま組み込み、年代不詳のものは年譜の最後に列記した。作品年譜史料及び図版資料における参考文献は次の通りである。

《楊守敬集》謝承仁主編　湖北人民出版社　一九八八年四月発行・『中国書論大系　第十八巻・清8』中田勇次郎編集　二玄社　一九九二年一一月二〇日発行・『図解書道史　第五巻』藤原楚水著　省心書房　一九七五年九月五日発行・『図説書道新講』伊東参洲著　日本習字普及協会　一九七二年一月二十日発行・『書道全集24中国14清国Ⅱ』平凡社　一九八七年九月一日発行・『中国歴史博物館蔵法書大観第十四巻・十五巻』中国歴史博物館編著　柳原書店　一九九八年十月二十八日発行・『中国書道全集　第八巻　清』下中直也発行人　平凡社　一九八八年五月二十五日発行・『定本書道全集　第十三巻』河出孝雄編集兼発行者　河出書房　一九五六年五月二十五日発行である。

又、記号別は以下の通りに定めた。無印は楊守敬の年譜とし、その他で用いた記号として、☆印は中国書史。★印は中国史関係を示し、▲印は楊の主たる作品を年譜に組みこんだ。○印は日本書史。◎印は日本文化史関係。●印は日本史関係とし表示することとした。

一八三九　己亥　清　天保十年　一歳

四月十五日　丑時　楊守敬生る

★林則徐、英国商人のアヘン二萬余箱を没収焼却

一八四〇　庚子　清　天保十一年　二歳

九月一日　丑時　弟の先三生る

六月　★アヘン戦争はじまる

○多田親愛生る（一八四〇～一九〇五）

一八四一　辛丑　清　天保十二年　三歳

☆呉栄光「辛丑銷夏記」

☆黄鉞没（九十二歳）

一八四二　壬寅　清　天保十三年　四歳

楊守敬の父病死。父、諱は有純、字は粋然。幼にして慧敏、十余歳、祖父の店を担任。過労により咯血

★英国軍、南京に迫り、南京条約・香港割譲

☆馬昂「貨布文字考」、沈涛「常山金石志」、魏源「海国図志」等成る

○華毘田　長崎に渡来

一八四三　癸卯　清　天保十四年　五歳

楊守敬嘗つて銭を数うる時、古銭をひろい出しあそぶ

★上海開港
☆何紹基、祠堂を京都の顧亭林の旧址に建つ。翌年落成
☆呉栄光没（七十一歳）
○巻菱湖没（六十七歳）（一七七七～一八四三）
○市河米庵編「五体墨場必携」、柳涯道人「臨池清談」成る

一八四四　甲辰　清　弘化元年　六歳
母より字を識り、書を読むことを教えられる
☆呉昌碩生る（一八四四～一九二七）
☆銭泳没（一七五九～一八四四）
○松崎慊堂没（七十四歳）

一八四五　乙巳　清　弘化二年　七歳
家にて読書す
☆梁章鉅「退庵金石書画跋」二十巻成る

一八四六　丙午　清　弘化三年　八歳
始め先三と覃先生より読を習う

一八四七　丁未　清　天保十八年　九歳
初めて作文を学ぶ
○西川春洞生る（一八四七～一九一五）

一八四八　戊申　清　嘉永元年　十歳
謝先生より読を学ぶ。
☆劉喜海「金石苑」二巻成る。
☆張廷済没（八十一歳）
○滝沢馬琴没（八十二歳）「遍類六書通」「墨蹟鑒定先哲便覧」等成る

一八四九　己酉　清　嘉永二年　十一歳
祖父の年七十に近きをもって、守敬及先三読を止む。守敬をもって孫姑丈の煙店に出し貿易を学ばしむ。夜間書を読み、目を悪くし、夜になると瞽者と同様
☆阮元没（八十六歳）（一七六四～一八四九）
○高芙蓉「文房四友印記」を刻す

一八五〇　庚戌　清　嘉永三年　十二歳
家に戻り自分の店を守る
☆呉蘭修「両漢金石志」二巻成る
★太平天国の乱起こる

一八五一　辛亥　清　嘉永四年　十三歳
長髪賊の乱により祖母と岳陽朱宗湾の李姓家に逃る
○篠崎小竹没（一七八一～一八五一）

一八五二　壬子　清　嘉永五年　十四歳
朱鳳池先生について学ぶ。この年の始め、文官試験が開かる。初めて試験を受けるも落第
★太平軍、武昌・漢陽を陥れる
○石川梧堂没（?～一八五二）

一八五三　癸丑　清　嘉永六年　十五歳
祖父、授業料の高きをもって守敬をして家にて学ぶ
★太平軍、南京を陥れ天京とす
十月
☆張廉卿の長子沆生る
○前田黙風生る（一八五三～一九一八）

一八五四　甲寅　清　安政元年　十六歳
試験が開かれるも、祖父の許を得ず受験せず

一八五五　乙卯　清　安政二年　十七歳
楊守敬　結婚する
☆包世臣没（一七七五～一八五五）

○阪正臣生る（一八五五～一九三一）

一八五六　丙辰　清　安政三年　十八歳

八月　祖父に請いて府の補考に行く。三び院試を受くるも及ばず

一八五七　丁巳　清　安政四年　十九歳

江陵の朱槐郷（景雲）先生より読を習う。国朝諸儒の学を聞く

☆康有為生る（一八五〇～一九二七）

一八五八　戊午　清　安政五年　二十歳

試験が開かれ、守敬は朱先生に隋い受けたが失敗。安徽太平孫玉堂（璧文）、乱を宜都に避け、太平会館にあり、因って交流す。浙江の鄭譜香から『六巌輿地図』を見せて貰い仮りて図写す。元和顧子山（文机）が来り住む

☆許漣「夏承碑考」一巻刻成

○市川米庵没（七十九歳）（一七七九～一八五八）

一八五九　己未　清　安政六年　二十一歳

又試験が開かれ、守敬また受験するも失敗。長子必鈞生る

☆趙之謙　郷試に合格し更に会試を受く

☆張維屏没（八十歳）

一八六〇　庚申　清　安政七年　二十二歳

☆趙之琛没（一七八一～一八六〇）

☆銭正没（一八〇七～一八六〇）

●日米修好通商条約

◎長崎で金属活字邦文印刷始まる

一八六一　辛酉　清　文久元年　二十三歳

抜貢が試みられたが、考に赴かず

一八六二　壬戌　清　文久二年　二十四歳

次子の必承生る。守敬、祖父の高齢にして郷試に赴かず

七月初旬　学師の忠告により、郷試を受験す

冬　礼部試に赴き、陸路により樊城に至り、広東遂渓の陳一山（喬森）に遇う

☆方朔「枕経堂金石書画」三巻成る

○小野鵞堂生る（一八六二～一九二二）

一八六三　癸亥　清　文久三年　二十五歳

正月　都に入る。陳一山より、広東文昌の潘孺初先生に知遇。鄧鉄香にも会う。守敬諸論を得て、知識は日に開く。店でいまだ見ざる書を買得するに車に満つ

☆李鴻章、上海に広方言館設立

☆斉白石生る（一八六三～一九五七）

○貫名海屋没（八十六歳）（一七七八～一八六三）

○山本竟山生る（一八六三～一九三四）

九月　○渡辺沙鷗生る（一八六三～一九一六）

○近藤雪竹生る（一八六三～一九二八）

一八六四　甲子　清　元治元年　二十六歳

冬　都に入り会試に応ぜんとすれども旅費なきに苦しむ。枝江の新挙人である彭雲峰（大与）とともに都に入る。樊城に至る

☆李佐賢「古泉匯」六十巻、続十四巻、趙之謙「補寰宇訪碑録」五巻、呉雲「二百蘭亭斎古印考蔵」六巻等成る

○佐久間象山没（一八一一～一八六四）

一八六五　乙丑　清　慶応元年　二十七歳

正月　都に行く。都中の友人は均しく余の都に留まることを勧む。毎日数学の後、琉璃廠法帖店に行き碑版文字を物色し、夜ふけて帰る。鉄香は金石を好み毎日市上に遊ぶ

一八六六　丙寅　清　慶応二年　二十八歳

教習の期間満つ
☆羅振玉生る（一八六六～一九四〇）
○中村不折生る（一八六六～一九四三）
○内藤湖南生る（一八六六～一九三四）
○中沢雪城没（一八〇八～一八六六）
○西村孝蔵編「古邨印賞」、柏木政矩編「集古印史」成る

一八六七　丁卯　清　慶応三年　二十九歳

宜昌会館に住す。湖南の友人の言により、山西高平県知事の龍皓臣の子に教える。市上は恐慌。暮、鉄香の家に寓す
○宮島詠士生る（一八六七～一九四三）

暮

十月　●明治新政開始

一八六八　戊辰　清　明治元年　三十歳

三月　会試を受くるも失敗。蘄州の黄雲鵠および武昌の范鶴生の両先生、余の文を見て高古絶倫となす。鉄香家に寓す。常に孺初と相行来す

四月　祖父死す。家に帰りて葬費なく、先三、すなわち盤龍堰田を売り費にあてんとす
☆呉大徴、進士となる
●江戸を東京と改称

九月　●年号を明治に改元
○山中信天翁・横井小楠・小野湖山・江馬天江・日下部鳴鶴・巌谷一六らが相次、太政官に奉職した。
○御家流がすたれる
●神仏分離令

三月　○岸田吟香帰国（吟香・八戸弘光・曽根嘯雲等は上海に住居）
○公文書唐様となる
○日下部鳴鶴、東京に出る
○井原雲涯生る（一八六八～一九二八）

一八六九　己巳　清　明治二年　三十一歳

家にて読学を授く。碑版研究の他、経史を習い、「論語事実録」を刻成し、「小学記録」あれども、今に存せず
○高田竹山　高斎単山の塾に入る

一八七〇　庚午　清　明治三年　三十二歳

岳家にありて読を授く。江水、街にあふれ、屋宇を流すこと無数。張小雲鼎煌と共に都に入る
☆呉熙載没（七十二歳）（一七九九～一八七〇）
★天津のキリスト教会焼打ち

九月　●平民に苗字を許す

一八七一　辛未　清　明治四年　三十三歳

二月　都に入り鉄香家に寓す

三月　会試を受くるも落第す。鄧家店田を人の重価を出して購わん
★日清通商天津条約
◎文部省博物局設置

七月　○河井荃廬生る（一八七一～一九四五）

六月　◎東京に師範学校開設

十一月　○副島蒼海、外務卿となる
○長三洲、大学少丞となる
◎廃藩置県行う。
◎郵便開始

一八七二　壬申　清　明治五年　三十四歳

家に在りて読を授く。始めて「望堂金石」を刻さんとす

☆呉雲「両罍軒彝器図釈」十二巻成る
○比田井天来生る（一八七二～一九三九）
一月　○中村水竹没（一八〇七～一八七二）
三月十日から◎日本初の博物館。文部省博物局の最初の仕事。東京湯島の旧聖堂大成堂を使って開催
八月　◎学制発布（フランスに習っての策で習字が主要科目）

一八七三　癸酉　清　明治六年　三十五歳

家にて読を授く
冬　会試を受けに都に行く。鉄香の家にとどまる
☆何紹基没（一七九九～一八七三）
三月　○副島蒼海　日清修好条規批准書交換のため渡清

一八七四　壬申　清　明治七年　三十六歳

会試あり失敗この時、銭塘の譚伸修、山陰の李蕤客、相廬の袁爽秋等皆都にあり。孺初、鉄香、一山等と文酒往来す。同邑の張雲陵、都に入り、磨茹皮を売り、貿易せんと欲す
☆瞿仲溶「集古官印考」十七巻、李佐賢「続泉説」等成る
○多田親愛、文部少録から東京博物館所属となる

一八七五　乙亥　清　明治八年　三十七歳

祖母の老病なるを伝う。よつて帰る
七月　大浦の何子峨（如璋）と天津を出づ。子峨、天津の商人に余の書善なるを告ぐ。家信を得たり。祖母の死を伝う
☆汪鋆「十二硯斎金石過眼録」十六巻成る
★徳宗即位す
春　◎奈良博覧会で正倉院宝物一般公開　楽毅論その他　聖武・孝謙帝等の賑宸翰写真撮影
十二月　○太田垣蓮月没（一七九一～一八七五）

一八七六　丙子　清　明治九年　三十八歳

先三の米店、営業不振。紙店を開く。先三、鴉片の病深し、守敬店を営業す。陸続として「望堂金石」を刻す。東湖の饒季音と「歴代輿地沿革険要図」を撰す
八月　☆張廉卿　黎庶昌と狼山に遊ぶ
十二月　☆黄遵憲、何如璋の駐日公使出使に随行員として、使日参賛にあてられる
☆鮑康「大銭図録」一巻、呉雲「二百蘭亭斎古銅印存」十二冊等成る
四月　○天皇　大久保利通邸に行幸　金井金洞・日下部鳴鶴御前揮毫
夏　○副島蒼海　清国漫遊　秋帰国
○「観古図譜」成る
○尾上柴舟生る（一八七六～一九五七）
○詩書画の風流会盛行。日下部鳴鶴、会を通じて川田甕江・長松秋琴・小野湖山・岡本奇石・森春濤等と知合う

一八七七　丁丑　清　明治十年　三十九歳

紙店を経営す。安徽望江の倪豹臣、荊州知府となり、府志を続修す。守敬を入れて纂輯員となす。「楷法溯源」を編す
☆清国、初代駐日公使、何如璋・黄遵憲来日す
☆王国維生る（一八七七～一九二七）
七月　○北方心泉　東本願寺の命により上海に赴く
八月　◎第一回内国勧業博覧会開催（書道部では成瀬大域・小野田由典・服部和喜が受賞　高斎単山・大沼蓮斎等入選）
九月　●西郷隆盛（南洲）自刃（一八二七～一八七七）
十月　◎三島三洲　二松学舎創立
○長三洲書〈小学習字本〉第七級の部（いろは）出版

○松田雪柯　上京
○清人王惕斎が東京築地で文房具・漢籍・薬類・の販売開始
◎東京大学設立

一八七八　戊寅　清　明治十一年　四十歳

先三一家の家計に資し、守敬別に薪水を求むるも猶不足。友人の多くが「楷法溯源」を購読す
○円山大迂、上海に赴き徐三庚について篆刻を学ぶ
五月　●大久保利通、暗殺（一八三〇～一八七八）島田一郎等に刺殺される
◎竜池会（後の日本美術協会）結成

一八七九　己卯　清　明治十二年　四十一歳

石子韓の勧めにより書を売る倪豹臣、余に古今銭略稿を刻さしむ。潘孺初、楊守敬の困を済う。駐日大使何子峨の手紙を得、日本に招くのを手伝う
☆黄遵憲日本語を学び日本の書を読み始める「日本国志」著述の構想をたてる「日本雑事詩、百五十四首」をつくり印行
☆阮元「積古斎鼎彝器落識」十巻翻刻
○日下部鳴鶴、官を退き専ら揮毫生活に入る
○近藤雪竹　日下部鳴鶴に入門
○円山大迂　清国に赴く
十二月　○長三洲　官界を退き専ら揮毫生活に入る

一八八〇　庚辰　清　明治十三年　四十二歳

「集帖目録」十六巻成る。黄燮雲と日々筆墨を持ち瑠璃各帖店に行き、「集帖目録」を抄す。会試を受くるも合格せず
四月　家族とともに天津から上海に至り、何子峨の招きにより日本に渡る
楊守敬　公使随員として来日
十一月一日　先三病にて死す
二月　☆香港にて黄遵憲の「日本雑事詩」出版
○勢多桃谷　巌谷一六に入門
○中林梧竹　長崎に赴き　潘存の門人余瓏に書を学ぶ

一八八一　辛巳　清　明治十四年　四十三歳

正月　英国大使黎純斎（庶昌）を以って日本大使となす。張廉卿裕釗の子道民を見る
十一月　駐日公使として赴く黎庶昌を揚州に送る。黎庶昌　清国公使に着任す
☆楊沂孫没（一八一三～一八八一）
☆劉喜海「海東金石苑補遺」六巻、付録三巻、陸心源「千甓亭千録」四巻続録四巻等成る
☆魯迅生る（一八八一～一九三六）
▲「鴎雨荘」隷書　【図1】
○松田雪柯没（六十三歳）（一八一九～一八八一）
○北方心泉　東本願寺北京別院再興のため渡清
三月　○第二回内国勧業博覧会開催
五月　◎文部省小学校教則綱領通達（習字科は必修としてなお重視される）

一八八二　壬午　清　明治十五年　四十四歳

日本に至って初めて市上に遊び、書店の書、多くいまだ見ざるをみる。漢魏六朝の碑版多く、古銭、古印は日本人の羨むところ。日本の文学士と応接す
☆石印「初輯寰宇貞石図」成る
☆阮元「積古斎鐘鼎彝器款識」十巻成る

☆陳澧没（七十三歳）
★黎庶昌　第二代公使として来日
▲「隷書蒙恬将軍碑」　三囲神社（注1）【図2】
八月　○中林梧竹　清国に渡り潘存に書を学ぶ

一八八三　癸未　清　明治十六年　四十五歳
黄岡県教諭に選ばる。黎公、公文を以って都督に咨して云く、刻書の事を経理す。黎公に代りて跋をつくる
☆張廉卿　保定蓮池書院主講就任（学古堂を兼ねる）
○高芙蓉百回忌
○北方心泉　帰朝（明治十年から留学生を率いて上海・蘇州・杭州・北京を廻り十六年帰朝）
○田代秋鶴生る（一八八三～一九四六）

一八八四　甲申　清　明治十七年　四十六歳
「古逸叢書」すでに成る
四月　家書を得る。母の病を告げ帰るを促す
五月　岡千仞父子および王惕斎等とともに上海に至る。黄岡教諭の任に赴く
☆呉大澂「説文古籀補」十四巻付録一巻の写刻本成る
五月二十九日　楊守敬帰国
九月　☆岡千仞　蓮池書院（張廉卿）を来訪
☆趙之謙没（一八二九～一八八四）
☆陳介祺没（一八一三～一八八四）
春　○中林梧竹　帰国（六朝の古碑拓本を多数と共に）長崎に帰着

一八八五　乙酉　清　明治十八年　四十七歳
彭中の丞祖賢、「湖北通志」を修す。門人熊固芝を以って襄助とす
☆呉大澂「恒軒所見所蔵吉金録」一巻、羅振玉「金石萃編校字記」一巻等成る

一八八六　丙戌　清　明治十九年　四十八歳
二月　都に入り会試に応ずるも落第
四月　固芝（注2）と草を起こし「隋書地理志考證」をつくる。会試をあきらめ著述に専念す。孫の先棐生る
☆潘天寿生る（一八八六～一九七一）
○巻菱潭没（一八四五～一八八六）
○秋山碧城　清国に赴き徐三庚に学ぶ

一八八七　丁亥　清　明治二十年　四十九歳
「隋志初稿」を以って自ら各地を検しこれに編入す
○宮島詠士　中国に留学（一八八七～一八九四）蓮池書院（張廉卿）を来訪、入門
☆黎庶昌　蓮池書院（張廉卿）を来訪
☆沈尹默生る（一八八七～一九七一）
○川谷尚亭生る（一八八七～一九三三）

一八八八　戊子　清　明治二十一年　五十歳
黄州に隣蘇園を築き、以って書を蔵す。その城北は蘇東坡の赤壁にあたり、故に以って名とす。「古詩存」を襄校す
☆孫詒讓「古籀拾遺」三巻刻成
四月　◎フェノロサ・岡倉天心・九鬼隆一等、古美術を調査
○山岡鉄舟没（一八三八～一八八八）
○日下部鳴鶴に丹羽海鶴・山本竟山入門
○巌谷一六・金井金洞　元老院議官となる
◎東京美術学校設立

一八八九　己丑　清　明治二十二年　五十一歳

丁棟臣（非松）と草を起こし「漢書地理図」未だ成らず、「隋志稿」を増訂す

十二月　☆康有為「廣藝舟雙揖」成る

○京都美術学校開校

○渡辺沙鷗　日下部鳴鶴に入門

○田中親美　多田親愛に学ぶ

●大日本帝国憲法発布

一八九〇　庚寅　清　明治二十三年　五十二歳

崮芝の「隋志稿」と余稿と参互して第二稿をつくる

☆徐三庚没（一八二六～一八九〇）

☆潘祖陰没（一八三〇～一八九〇）

○小野鵞堂〈斯華会〉創立

一八九一　辛卯　清　明治二十四年　五十三歳

厳鉄稿「古文存」二十巻を補す。孫の先楙、先梅生る

☆郭沫若生る（一八九一～一九七八）

○日下部鳴鶴　上海・杭州に遊ぶ

○豊道春海　西川春洞に入門、岡本椿所　中井敬所に入門

○三条実美没（一八三七～一八九一）

○中林梧竹　十七帖を臨書。副島蒼海の斡旋で天皇に献上

春　○宮島詠士帰国

秋

一八九二　壬辰　清　明治二十五年　五十四歳

又、隋志を校し第三次稿をつくる。鄰蘇園帖刻

☆潘存没（注3）（?～一八九二）

○日下部鳴鶴に　井原雲涯入門

○川谷横雲　西川蓼花に入門

○武田霞洞　西川春洞に入門

○前田黙鳳編〈真行草大字典〉刊、江川近情〈書学会〉創立

一八九三　癸巳　清　明治二十六年　五十五歳

三女を嫁す。孫の先橘生る。鄰蘇園帖を続刻す

☆宮島詠士を迎える

七月　◎岡倉天心　博物館より清国視察に派遣

一八九四　甲午　清　明治二十七年　五十六歳

隋志写浄本を以って梓人に付す。この年省にあり

一月十四日　☆張廉卿没（一八二三～一八九四）西安に死去し終南山に葬る

☆張廷済「清儀閣金石題識」四巻成る

○宮島詠士　留学から帰国

七月　○長三洲・杉聴雨　東宮職御用掛となる

八月　●日清両国が宣戦布告

○日下部鳴鶴　同好会を起こす

十一月　○前田黙鳳著〈仮名彙纂〉書学会刊

一八九五　乙未　清　明治二十八年　五十七歳

「隋志」刻成、七月省にのぼらんとするに途中、母の病を聞き黄に帰る。母死す。宜都の本籍に赴く。帰途沙市を通るに余の書を求むる者多く、母の葬費のため参百串を得て帰る

☆阮元「積古斎蔵器目」一巻、呉式芬「攈古録金文」二巻成る

●日清講和条約に調印（下関条約）

三月　長三洲没（一八三三～一八九五）

八月　○中村不折　従軍渡清、帰国

一八九六　丙申　清　明治二十九年　五十八歳

正月　又沙市に行く

六月　宜都に帰る

九月　黄州に赴き母の柩を安挑す

十月一日　宜都に行き葬を終る
☆楊見山没（一八一九～一八九六）
八月　○大口鯛二　西本願寺の庫裡より〈三十六人家集〉発見
十一月　○中林梧竹　郷里の佐賀県小城町に帰る
○阪正臣　常宮、周宮両内親王に国文・習字の教授

一八九七　丁酉　清　明治三十年　五十九歳

二月　長子必釣の病深く次子をつれ黄州に帰る
六月　長子死せり
黄州　鄰蘇園に帰り、黄州教官につくを計る。蔵書を点検し「日本訪書志」及び「留真譜」を刻す。地理・金石学の研究、書志の出版
○中林梧竹・河井荃廬　先後して清国に遊ぶ
▲楷書対聯

一八九八　戊戌　清　明治三十一年　六十歳

房屋を売る者あり。頗る寛広にして価は大いに廉
これを購ず
十二月　○中林梧竹書〈鎮国之山〉銅碑を富士山に建つ
七月　◎岡倉天心　美術学校を辞し日本美術院を創立
八月　○高田緑雲没（一八二六～一八九八）
十一月　○中村春堂　小野鵞堂に入門
冬　○西村天囚・北方心泉　清国に遊ぶ

一八九九　己亥　清　明治三十二年　六十一歳

張文襄の電信により、両湖書院の教習に充つ
武昌に赴く　地理一門の事に任ず
二月　●勝海舟没（一八二三～一八九九）
○北方心泉　渡清、南京に金陵東文学堂を創設、学長となる
七月　○小西虎彦〈鉄筆奨励会〉を起こす。ペン書きが普及
○上田桑鳩生る

一九〇〇　庚子　清　明治三十三年　六十二歳

書院館に就く、「漢書地理志補校」、「晦明軒稿」各一冊を刻す。
柯中の丞巽庵のため「大観本草」を刻す
★義和団事件起る
二月　▲「隷書七言対聯」　【図3】
☆沙孟海生る（一九〇〇～一九九二）
○北方心泉等　帰国
◎大谷探検が敦煌発掘
○河井荃廬　清国に渡り呉昌碩に従学
三月　○松井如流生る
八月　◎小学校令改正（習字は国語科の一科となり独立を失う）
九月　◎文部省　漢字制限の企てあり。仮名制定
○小野鵞堂　九条節子姫に習字教授を命ぜらる
○阪正臣　内親王富美宮の御用掛となる
☆王懿栄没（一八四五～一九〇〇）

一九〇一　辛丑　清　明治三十四年　六十三歳

六月二十日　黄州より信を得。妻、痢を患い医治の効なし
七月二十一日妻死せり
☆スウェーン・ヘデン、楼蘭にて木簡一二一片発掘。アウレル・スタイン、ニヤにて木簡五〇片発掘
●孫文　日本に亡命
一月　◎中等漢文科廃止の声起る
○江馬天江没（一八二五～一九〇一）
○中島湘煙没（一八六三～一九〇一）

二月　○日比野五鳳生る
六月　○中村不折　渡仏　コラン・ローランに画を学ぶ
十一月　○手島右卿生る（一九〇一～一九八七）
○渡辺沙鷗　日本書道会を起す

一九〇二　壬寅　清　明治三十五年　六十四歳

勤成学堂を建て総教長となす。学使蔣式芬の奏上を蒙り、四品銜を加えられる
冬　「大観本草」を刻す「叢書挙要」二十巻写成するもいまだ刊せず。叢書の刻は宋代よりおこる
☆劉心源「奇觚室吉金文述」二十巻印成る
☆呉大徴没（一八三五～一九〇二）
一月　○田中親美〈西本願寺本三十六人家集〉の複製に着手
○高田忠周（竹山）設文会で説文の講義をはじむ
二月　○成瀬大域没（一八二七～一九〇二）
三月　○山本竟山（四十歳）渡航、中国に遊学す（第一回）
七月　○渡辺沙鷗　六朝展覧会開催
十二月　○篠田芥津没（一八二六～一九〇二）
○鈴木雲堂　日下部鳴鶴に入門
○西川寧生る（一九〇二～一九八九）

一九〇三　癸卯　清　明治三十六年　六十五歳

菊湾に書楼を起つ。経済特科を開く。「壬癸金石跋」を刻成
●端午橋「匋斎蔵石目」一巻、劉鶚「鉄雲蔵亀」等成る
一月　○日下部鳴鶴書〈中等習字書〉二冊刊
二月　○高橋泥舟没（一八二五～一九〇三）
三月　○第五回内国勧業博覧会　大阪で開催
十二月　○落合直文没（一八六一～一九〇三）
○小野鵞堂　斯花会を起し書道講習録を発行
○吉田苞竹　黒崎研堂に入門
○山本竟山　再び渡清（四十一歳）呉昌硯・顧鶴逸・徐子静・金冷香の諸家を訪ね、武昌に行き楊守敬の邸に寄遇し、金石を閲覧、名品〔皇甫誕碑・（丞然本）・宋拓争座位帖・餘清斎帖〕等数点を購い帰る

一九〇四　甲辰　清　明治三十七年　六十六歳

「水経注疏」の稿成る。酈氏の「水経注」、明代に至って朱謀瑋この箋をつくり始めて先路を導く
☆楊慎「金石古文」十四巻、劉鶚「鉄雲蔵匋」四冊等成る
☆西泠印社創立
一月　○講慎堂同窓会結成（諸井春畦・豊道春海等の主唱により西川春洞門の十二名参加）
二月　●日露両国開戦
三月　○岩田鶴皐　群鵞会を創立（明治三十年鳴鶴の門に入る）
四月　○日高秩父書〈国定尋常小学書キ方手本〉七冊〈高等小学書キ方手本〉八冊刊
九月　○多田親愛〈掘江物語〉二巻を浄書　皇后宮に献上。小泉八雲没
十月　○生井子華生る
十一月　○新岡旭宇没（一八三四～一九〇四）
○田代秋鶴　丹羽海鶴に入門かねて日下部鳴鶴に益をうく
○伊藤芳雲　小野鵞堂に入門。小野鵞堂〈斯花の友〉創刊

一九〇五　乙巳　清　明治三十八年　六十七歳

「水経注図」を刻す。「水経注疏要刪」を刻成す
★科挙の制度を廃止。孫文ら、東京にて中国革命同盟会結成
☆黄遵憲没（一八四八～一九〇五）日本国志

☆孫詒讓「名原」二巻なる。劉喜海「長安獲古編」二巻を劉鶚が補刻す

十月　▲「隷書條幅」　荊州博物館蔵

一月　○副島種臣（蒼海）没（一八一八～一九〇五）

四月　○多田親愛没（一八四〇～一九〇五）

○中村不折　フランスより帰る

○富田近之助著〈小学書キ方教授法〉刊

六月　○岸田吟香没（一八三三～一九〇五）

七月　○巌谷一六没（一八三四～一九〇五）

○北方心泉没（一八五〇～一九〇五）

十一月　○内藤湖南、小村全権大使に招かれ北京に赴く

十二月　○谷如意没（一八二二～一九〇五）

一九〇六　丙午　清　明治三十九年　六十八歳

三月　端午橋　余を招く。金陵署中に至り、蔵するところの金石碑版に題跋す

四月　上海に至り甘香山（翰臣）の家に寓す

五月　家に帰る。「禹貢本義」および「重訂歴代沿革険要図」「春秋地図」を刻成す

☆繆荃孫「藝風堂金石文字目」十八巻、朱為弼「積古斎鐘鼎款識稿本」四巻等成る

☆兪曲園没（一八二一～一九〇六）

四月　○小野鵞堂　学習院の教課授業を嘱託さる

○植松有経没（一八三九～一九〇六）

○黒川真頼没（一八三四～一九〇六）

○川村驥山　沼津御用邸で皇太子の御前揮毫

○小野鵞堂〈書道講習録〉刊

○植村和堂生る

十一月　○山本竟山第三回中国遊学。碑法帖等多数を得て翌年一月十六日台北へ帰る。潘存臨争座位帖入手

一九〇七　丁未　清　明治四十年　六十九歳

七月　勤成学堂を改めて存古学堂とす

八月　学を開く。余及び馬季立（貞榆）を以って総教とす

文襄、閣に入る。湖北の二人（柯巽庵、守敬）「三国郡県表補正」及び「三国地理図」を刻成す

☆震鈞「国朝書人輯略」成る

三月　○東京勧業博覧会に篆刻参加

四月　○吉田晩稼没（一八三一～一九〇七）

五月　○金井金洞没（一八三三～一九〇七）

六月　○美術審査委員会管制勅令をもって公布さる。談書会創立（巌谷小波・犬養木堂・阪正臣等の発起により、中村不折・日下部鳴鶴等幹事となる）

七月　○日本書道会創立（野村素軒・渡辺沙鷗・中根半嶺・久志本梅荘・諸井春畦等幹事となる）

十月　○恒川宕谷没（一八一九～一九〇七）

◎第一回文展開催

十一月　○市川万庵没（一八三〇～一九〇七）

○鈴木雪洞　鳴鶴の推薦により宮内省に入る

○田中芳洲　書道奨励会の幹事となり〈筆の友〉編輯する

○小野紅蘭　小野鵞堂に師事、観鵞会創立（大阪）

九月　○上条信山生る

○丁未印社創立（岡本椿所・五世蔵六等による）

一九〇八　戊申　清　明治四十一年　七十歳

存古学堂初開の時、張文襄、自ら監督となり、黄仲弢を提調に任ず。「漢書二十四家遺注」を輯成。顔師古「漢書」注して世々称せらる。孫の先斎生る

七月　☆端方「匋斎吉金録」、張鳴珂「寒松閣譚藝瑣録」等成る

八月　○田中親美　古筆集〈月影帖〉影印

○若林快雪没（一八四三～一九〇八）

○玉木愛石　東京駿河台に塾を開く

○中井敬所　東宮の内旨により水晶印三顆を刻す

○前田黙鳳　健筆会を創立

一九〇九　己酉　清　明治四十二年　七十一歳

三月　「続輯寰宇貞石図」を石印す。「水経注疏要刪補遺」及び「続補遺」成る。「戦国、続漢、西晋、東晋、劉、宋、蕭、斉、隋地図」を刻成す

☆葉昌熾「語石」十巻、呉隠「遯庵古泉存」八巻等成る

二月　◎〈西本願寺本三十六人家集〉一部影印（本願寺室内部）

五月　○建筆会第一回展覧会

九月　○内藤湖南　京都帝大教授となる

○中井敬所没（一八三一～一九〇九）

十月　●伊藤博文、ハルピンで暗殺される（一八四一～一九〇九）

十一月　○浜村蔵六（五世）没（一八六六～一九〇九）

○木俣曲水、日下部鳴鶴に入門また小野鵞堂に仮名を学ぶ

○黙鳳書話会発足（芦野楠山・岡麓等発起）。磯野秋渚、学書会を起こす（大阪）

▲「七言聯」行書　【図4】

一九一〇　庚戌　清　明治四十三年　七十二歳

「北魏、西魏地図」を刻す。「望堂金石」二集を刻成す。「三続寰宇訪碑録」十六巻成る。「古地志」三十二巻なる完成。孫の先漢生る

十二月　☆呉士鑑「九鐘精舎金石跋尾甲編」一巻刻成。羅振玉「殷商貞卜文字考」一巻、呉陰「「遯庵秦漢瓦当存」等成る

四月　○小野湖山没（一八一三～一九一〇）

○日高秩父・香川松石書〈固定書キ方手本〉改訂出版

六月　○第二回健筆会展覧会

▲「孟浩然詩」行書　故宮博物院蔵　【図5】

▲「説文解字序」

▲「程本位・題山水小畫」

▲「臨　倪元璐・瑞芝」

九月　○日下部鳴鶴書〈大久保公神道碑〉

○横雲　西川蓼花に入門

○竹田竹山〈漢字詳解〉第一冊刊

○山本竟山第四回中国遊学。碑法帖等五十余点を得て帰る

一九一一　辛亥　清　明治四十四年　七十三歳

蕭梁、唐、宋、遼、金の各地図を刻成す。十六国および陳、北斉、北周五代、元、明の各地図を絵く。

革命軍、事を起す

八月十九日　革命党三名を捕う。

十一月一日　停戦の期到る

十一月十一日楊守敬、上海元、明の各地図を絵く

十二月　★辛亥革命起こる。羅振玉・王国維が逃れて京都に来る

○謙慎書道会が明治書道会と改称

一九一二　壬子　民国　明治四十五年　七十四歳

一月　★孫文、南京にて臨時大総統に就任、翌月辞任

二月　★宣統帝退位して清、滅亡。中華民国成立

一月五日　水野疎梅（注4）、上海高昌廟の旅次に写す

一月　○談書会設立、日下部鳴鶴らが発起

二月　○日本書道会が開かれ、野村素軒・西川春洞・中根半嶺らの作品展覧

五月　○水野疎梅訳「学書邇言」楊守敬著が朝日新聞に掲載された。九月に単行本刊行

暮　○山本寛山上海に争乱を避けている楊守敬の安否をたずね中国へ渡る。第五回中国遊学

○中林梧竹没（八十七歳）

一九一三　癸丑　民国　大正二年　七十五歳

☆孫文、第二革命を起こし、失敗して日本に亡命

▲隷書七言二句

一九一四　甲寅　民国　大正三年　七十六歳

▲「六言詩」　重慶市博物館蔵　【図6】

一九一五　乙卯　民国　大正四年　七十七歳

★日本の二十一ヵ条要求を受諾。排日運動激化

一月　楊守敬没（北京にて）

二月　○山本竟山主唱、京都で楊守敬の追悼会が行われ、府中図書館において遺墨展が催された

年記不詳作品

▲「行書屏　水経注汶水」【図7】

▲「致節盦」書札【図8】

▲「行書正気歌」【図9】

▲「臨　顔魯公裴将軍碑」行書【図10】

▲「五言詩対聯」【図11】

▲「行書七言聯」【図12】

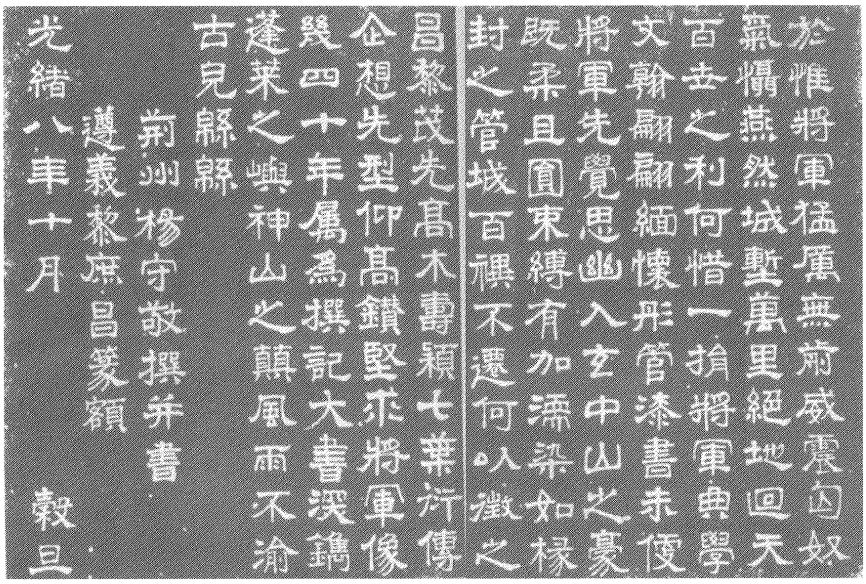
▲「水経淦水注」　書壇院蔵【図13】

▲「行書香山廬山草堂記」

▲「隷楷」

〔図1〕 鴎雨荘

〔図2〕 隷書蒙恬将軍碑



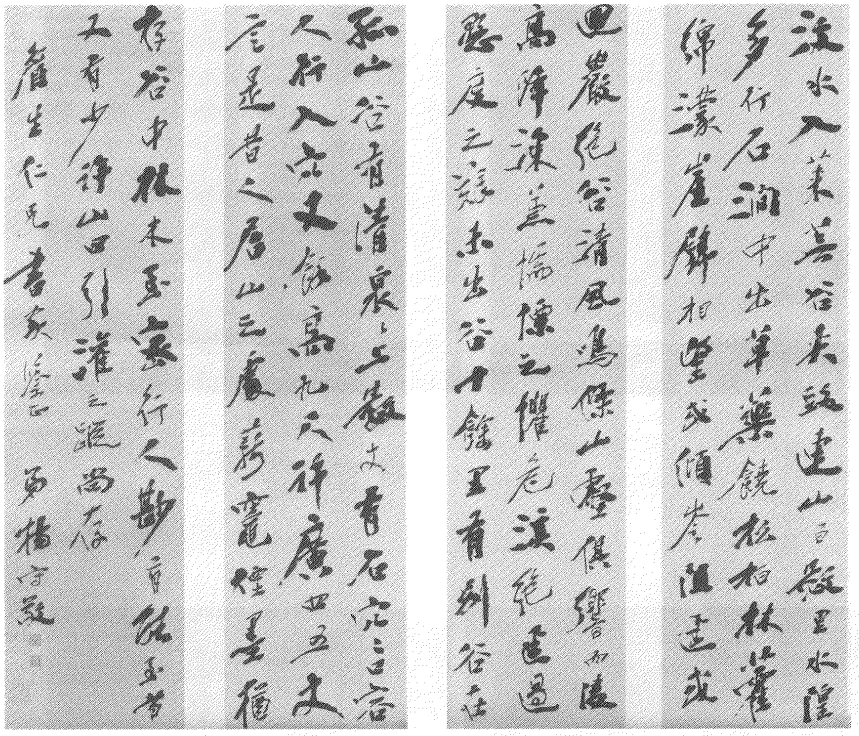
〔図3〕 隷書七言対聯

〔図4〕 七言聯 行書

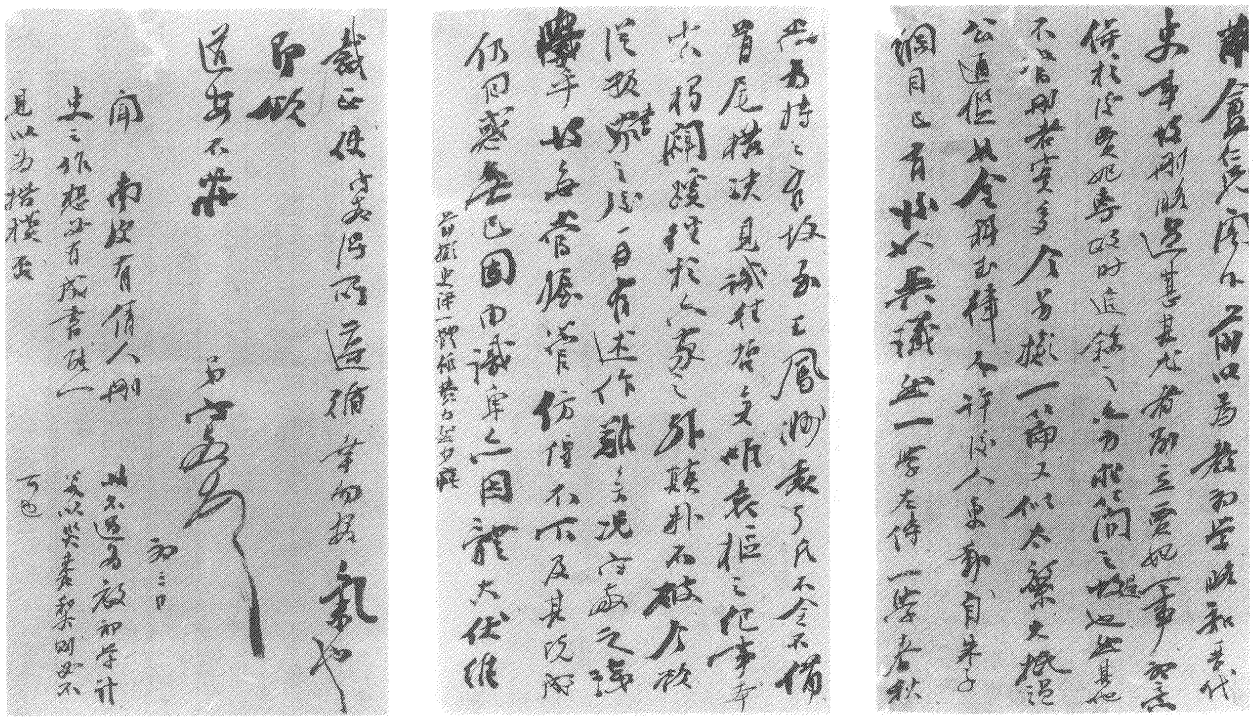
〔図5〕 孟浩然詩 行書

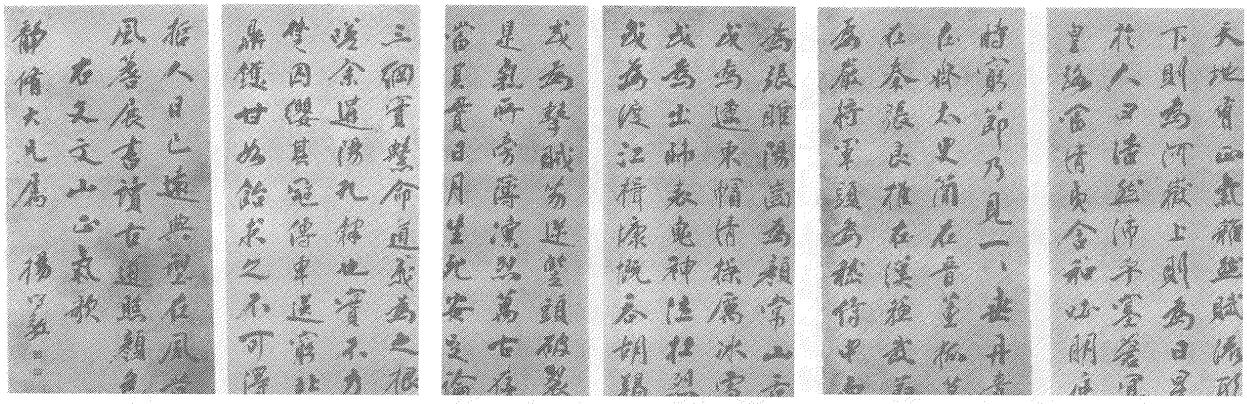
〔図6〕 六言詩　行書

〔図7〕 行書屏　水経注汶水



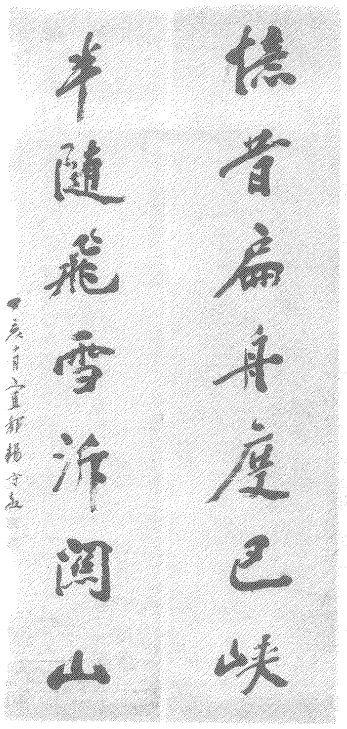
〔図8〕 致節盦書札





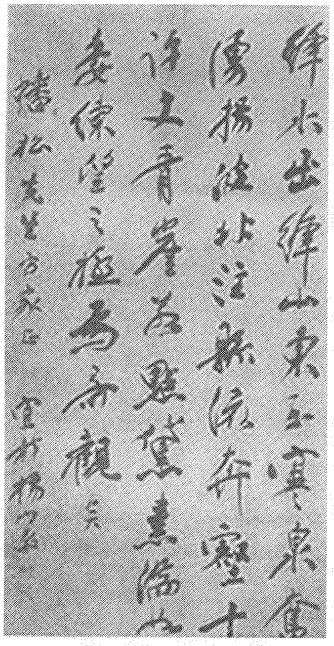
〔図9〕 行書正気歌

〔図10〕 臨 顔魯公裴将軍碑



〔図11〕 五言詩対聯

〔図12〕 行書七言聯



〔図13〕 水經澮水注

楊守敬図版資料の釈文

【図1】鴟雨荘（一八八一）

〔釈文〕鴟雨荘　辛巳暮春　楊守敬

【図2】隷書蒙恬将軍碑（注5）（一八八二）

〔釈文〕於惟将軍猛厲無前威震度匈奴懾燕然城塹萬里絶地迴天百吝之利何惜一損
将軍典學文翰翩翩緬懐彤管漆書未便将軍先覺思幽入玄中山之豪既柔且圓束縛有加
濡染如椽封之管城百禩不何叭澂之昌黎茂先高木壽穎七葉衍傳企想先型仰高鑽堅求
将軍像幾四十年属為撰記大書深鐫蓬萊之嶼神山之顛風雨不渝古見緜緜　荊州楊守
敬撰并書　遵義黎庶昌篆額　光緒八年十月　穀旦

【図3】隷書七言対聯（一九〇〇）

〔釈文〕将弊鄴下劉公幹　独憶平生盛孝章

【図4】七言聯　行書（一九〇九）

〔釈文〕蜃嘘翠霧作樓閣、鳥弄歌聲雜管絃。　秋帆

【図5】孟浩然詩　行書（一九一〇）仁兄方家正、宣統元年三月宜都楊守敬

〔釈文〕山寺鳴鐘晝已昏魚梁度頭爭度喧人隨沙岸向江邨予亦乘舟歸鹿門鹿門月照
開煙樹忽到龐公棲隱處巖扉松徑長寂寥唯有幽人自來去録孟襄陽詩宣統庚戌九月隣
蘇老人書于鄂城菊灣時年七月有二

【図6】六言詩　行書（一九一四）

〔釈文〕山路只通樵客江邨半是漁家秋水磯邊落雁夕陽影裏飛鴉甲寅秋日體仁姻世
兄屬守敬書時年七十有）　六壁

【図7】行書屏　水経注汶水（注6）

〔釈文〕汶水、入莱蕪谷、夾路連山百数里、水隍多行石澗中。出草薬、饒松柏。
林藿綿濛、崖壁相望。或傾岑阻逕、或廻巖絶谷。清風鳴条、山壑俱響。而陵高降
深、兼惴慄之懼。危渓絶逕、過懸度之艱。未出谷十餘里、有別谷在弧山。谷有清
泉。泉上数丈、有石穴二口。容人行入。穴丈餘、高九尺許、広四五丈。言是昔人
居山之処。薪竈煙墨、猶存谷中。林木至密、行人尠有能至者。又有少許山田、引
灌之蹤尚存。　眉生仁兄書家鑒正　弟楊守敬

【図8】致節盦書札

〔釈文〕節盦仁兄閣下、前以為教初學、略知晉代史事、故刪略過甚。其尤者、削
立賈妃一事。初意併後賈妃專政時追敍之、亦力求簡之過也。然他不當刪者實多。
今另擬一篇、又似太繁。大抵温公通鑒如金料玉律、不許後人更動。自朱子綱目已
有後人異議。然一學左傳・一學春秋尚為持之有故、至王鳳洲・袁了凡不全不備首
尾横決、見譏往哲矣。唯袁樞之紀事本末、獨闢蹊徑於六家之外、顚朴（僕）不破。
今欲從數書之後、再有述作難矣。況守敬之淺學乎。故每當握管、彷徨不下。及其
既成、仍回（回）惑無已。固由識卑、亦因體大（前擬史評一體、雖費力、然少疾）。
伏維栽正、使守敬得所遵循、幸勿客氣也。即頌道安。不莊。弟守敬頓首。初三日。
聞南皮有倩人刪史之作、想必有成書、能一見以為偕模否。此不過為教初學計、若
以災棗梨、則必不可也。

【図9】行書正氣歌

〔釈文〕天地有正氣、雜然賦流形、下則為河嶽、上則為日星、于人日浩然、沛乎
塞蒼冥、皇路當清夷、含和吐明庭、時窮節乃見、一一垂丹青、在斉太史簡、在晉
董狐筆、在秦張良権、在漢蘇武節、為嚴将軍頭、為嵇侍中血、為張睢陽齒、為顔
常山舌、或為遼東帽、清操厲冰雪、或為出師表、鬼神泣壯烈、或為渡江楫、慷慨
呑胡羯、或為擊賊笏、逆竪頭破裂、是氣所旁薄、凛烈萬古在、當其貫日月、生死
安足論、地維賴以立、天柱賴以尊、三綱實係命、道義為之根、嗟余遘陽九、隷也
實不力、楚囚纓其冠、傳車送窮北、鼎鑊甘如飴、求之不可得、（省略部分）（注
7）〔陰房闃鬼火、春院閉天黒、牛驥同一皀、雞棲鳳皇食、一朝蒙霧露、分作溝
中瘠、如此再寒暑、百沴自辟易、哀哉沮洳場、為我安楽國、豈有他繆巧、陰陽不
能賊、顧此耿耿存、仰視浮雲白、悠悠我心悲、蒼天曷有極〕哲人日已遠、典型在
宿昔、風簷展書讀、古道照顔色　右文文山正氣歌　静侑大兄属　楊守敬

【図10】臨　顔魯公裴将軍碑（注8）

〔釈文〕馬若龍虎騰陵何壯哉将軍裴将軍大君制六合猛将清九垓戦臨

【図11】五言詩対聯

〔釈文〕研朱點周易　飲酒和陶詩　楊守敬

【図12】行書七言聯

〔釈文〕憶昔扁舟度巴峽　半随飛雪泝関山　甲亥宜都楊守敬

北荒恒赫耀英材臨顔魯公裴将軍

【図13】水經澮水注

〔釈文〕絳水出絳山東至寒泉奮湧。揚波北注。縣流奔壑。十許丈。青崖若點黛。素湍如委練。望之極為奇觀矣。蟠松先生方家正。宜都楊守敬

【注】

1　三囲神社―東京都墨田区向島（隅田川の桜橋付近）にある稲荷神社。祭神は倉稲魂命。俳人其角が雨乞いのため「夕立や田をみめぐりの神ならば」の句を神前に奉じたと伝える。

2　崮芝―熊會貞（一八六〇～一九三六）字崮芝（一作、固之）湖北枝江縣人。楊から四十年学び、共に《隋書地理志考證》《歴代輿地図圖》《水經注圖》等の楊の著作に助力した。

3　潘存―字孺初、廣東文昌縣の人。学業と共に生活面をも楊をささえた師。

4　水野疎梅―（約一八六四～?）名は元直、字疎梅。上海にて楊守敬を師と仰ぎ、書法を学び「学書邇言」「鄰蘇老人年譜」を記した。

5　蒙恬将軍―蒙恬（?～前二一〇）先祖は斉の人。祖父は蒙驁の時、秦に仕え、上卿となり韓、趙、魏を討った。子が蒙武で孫が蒙恬である。始皇二十六年（前二二〇）蒙恬は秦の将軍になり、斉を討ち内史となった。天下を統一した秦は、蒙恬に河南を取らせた。蒙恬は長城を築き険塞とした。それは臨洮から遼東に及ぶ一万里であった。

さらに黄河を越え陽山（内蒙古自治区五原県の西北。狼山）を拠点として上郡（陝西省延安・榆林県）に駐屯した。始皇帝は外を蒙恬に、内は蒙毅を上卿として内政を担当させた。始皇帝は、蒙恬に九原（内蒙古自治区五原県）から甘泉（陝西省淳化県甘泉山）に至る道をつくらせたが、三十七年（前二一〇）会稽から瑯邪に向かい病にかかり崩御した。

しかし崩御は隠され改竄された詔書は始皇帝の長子扶蘇と蒙恬に送られ、扶蘇は自害、蒙恬は陽周（陝西省子長県）に拘束された。胡亥が二世皇帝として即位し、趙高は蒙兄弟を弾劾し蒙毅を殺してしまった。蒙恬は万里にわたる城壁を築いたことを天罰とし毒薬自殺した。

6　水経注―北魏の酈道元の著。全四十巻。《水経》をもととした注釈。各地の河川千二百五十二を紹介、三十万字の注を付し、原書の二十倍もある。系統的な水の筋に基づく地理の名著。注とは水流と水流との間に道をつけ、そこに水を注いで両者の関係を通ずるごとく、本文に解釈をほどこすこと。

さらにその注を一層わかりやすくするために、掘割をつくって水を通すように、詳しく解釈を加えることを疏という。楊守敬の著作「水経注疏」とは「水経注」に対する詳細な解釈の研究である。

行書屏四幅は《水経注》の巻二十四、汶水の一節を書きしるしたもので、武漢の書法家協会から中田勇次郎氏に贈られたもの。

7　省略部分―行書正氣歌は『図解書道史　第五巻』（藤原楚水著　発行省心書房　一九七五年九月五日発行）の図版を抜粋したものであるが、陰房鬫鬼火から蒼天曷有極までの部分が省略されていた為その旨記した。

8　裴将軍詩―「送裴将軍詩」また「裴将軍詩」とも云う。裴将軍は唐の開元年間（七一三～七四一）の武将で剣舞の名人として知られる裴旻を指すといわれ、その北方征伐の送別にあたって贈った五言古詩を、楷行草を入れ篆隷の筆意を含ませたもの。唐の顔真卿の書といわれる破体の書。『忠義堂帖』に刻される作で、南宋の嘉定八年～十年の間に『忠義堂帖』に刻されてから世に出た。別に墨跡本が伝世するが偽跡である。明の王世貞

が入手した後、清の乾隆帝の内府に入った。これを清の王樹や楊守敬が奇趣の作として推称している。

【付記】

今回、楊守敬年譜稿の中に主たる作品を組み込むことによって、稿者は一つの見解に至った。

それは一九一〇年（庚戌）に書作が比較的多く試みられている。という点にあった。

この年は楊七十二歳の時にあたり、辛亥革命の起こる前年でもあった。また、山本竟山（一八六三～一九三四）が四十八歳の時に第四回目の中国遊学に出かけた年にあたっており、この時に竟山が碑法帖類五十余点を得て帰国しているのであるから、楊の書作がこの年に集中しているのも、竟山の懇願によるものではないか、との憶測がなされた。

しかし、今回の研究では確証を得るまでには至らなかったものの、楊が水野疎梅に語った中においても、数多くの書作を試みた理由についてが記されていた。翌年の一九一一年（辛亥）楊守敬、「隣蘇老人年譜」によると、

「日本人は余が此にあるを知りて余が書を求めるのでその揮毫代でなんとかくらしの補済が出来る。」

とあり、少なくとも辛亥頃において楊の書を求める日本人の為に、盛んに書作に励んでいた様子が記録として残されていた。

つまりこの事が多くの書を残す結果となったのだと言えよう。楊もまた革命のあおりを受けたのであるから、書作が貴重な収入源であったことは事実であった。このことによっても一九一〇年に集中していることが今回の年譜の中で実証できたのではないかと思っている。

しかし制作年代の判明を致しかねるものが多いのは、落成款識や跋文が不充分であることから生じるもので、それらが楊自身の名前のみに留まってしまっている事によるものであった。

いずれにせよ今回の研究は楊守敬作品のほんの一端を探ったにすぎなかった。したがってこれをもとに、さらに掘りさげた研究の必要性を痛切に感じた次第である。

以上

〔参考文献〕

中田勇次郎編『中国書論大系　第一八巻・清8』二玄社　一九九二年一一月二〇日発行

小川環樹著『宋詩選』筑摩書房　一九六七年三月一〇日発行

大橋成行・橋本坦山・榊山蘭編　山本寛山先生五十回忌追悼会運営実行委員会委員長大橋泰山発行　一九八三年三月二十五日発行